

第百五話

頼光朝臣上洛事付酒田公時事

『前太平記』上 卷第十六 三二五頁から三二八頁より

[頼光朝臣足柄山に英傑を見出す]

総州の太守頼光朝臣は、前々の天延四年八月には、任期を全うして、上洛するのがよい頃合いであったところ、先立ってその年の三月に太政官の役所から、公文書

太政官の廳より 下文を賜り、

を頂戴して御命令があり、急いで上洛なされよと命じられた。このようなことが

仰せ付けらるべき旨あり、

あった頃に、三月二十一日、お旅立ちの日となられたので、この国の武士は申すに及ばず、農民や工商に至るまで、すべての者が浜際見送りに出て準備をし、暇乞い

皆浜際に出で儲けて

をし（→別れを惜しみ）、すでに纜を解きなさったが、遠くに見える帆の姿が見え

御暇を乞ひ、

既に纜を解き給へ共、

帆影遙かに隠るゝまで

なくなるまで、その姿を見送って、とても名残惜しんだものだった。そして、太守

其跡を見送りにて、

甚だ余波を惜しみけり。

は相模国より陸地を通り、足柄山に差し掛かり、峠を遠くお見渡しになったところ、南は青い海が曇って暗くなっている、強い追い風は天にまで流れ、北には幾

南は蒼海冥朦として、

万点の帆風天に浜り、

北は

重にも重なった山が聳え立ち、花の枝は見えないが、言葉にできぬほどに気高い若

重山峙ちて、

花の梢は見へぬ共、

文なく誇る若葉の茂み、

葉の茂み、真っ青な空の中ほどの雲の上から真っ白と見えている雪は季節を知らな

青みたる中天の、雲の上より皓々と、

見へたる雪は時知らぬ、

いような様、富士の高根の誇らしげな姿も、他にない眺めで、少しの間馬を止め、

富士の高根の我貌なるも、

類無き眺めにて、

暫く御馬を扣へ、

ぶらぶらしておられたが、「渡部源次」お呼びになった。綱は、「ここにおりま

逍遥し給ひけるが、

す」と言って参上する。「どうしたのか、綱、あれを見よ。向こうの山の険しいと

ころに赤色の雲気がある。私は昔にこんなことを聞いた。東西南北には大きな雲気

があって、五つの色が揃い、それでいて雨が降らず、その雲の下には必ず賢人の隠

れ家があるそうだ。それゆえ、漢の高祖、始皇帝が疑念から逃れて、芒山と碭山の

間の沢の岩の間に隠れていたところ、妻の呂后が夫の跡を訪ね会いに来たところ、

高祖は怪しんで、『どうして私の隠れている場所を知っているのか』。呂后はいう

ことには、『貴方のいらっしゃる所にはいつも雲気がある。だから、その雲気を追

いここまで来たのです』といった。今あそこに雲気があるのは、きっと優れた人の隠れ住む場所であるはずだ。急いでみてきてくれ」と仰って、綱は「お引き受け申
一定人傑の隠れ居るなるべし。

し上げる」と、馬を引いてまたがり、例の雲気を目にとめ、馬を歩ませる。ある岩角につき、谷底を見下ろしてみたところ、屏風を立てたように、どのような駿馬で
とある岩かどに至りて、谷底を見下ろしたれば、 屏風立てたるが如くにて、 何なる駿足なりとも、

あろうとも、通ることは難しいと見えたので、すぐに馬から降りて、鞭を片手に
通る事は得難しと見へければ、 懸て馬を乗り放ち、 鞭片手に持ちて

もって、木陰の蜘蛛の糸を打ち払い草を押し分け、木の枝に縋り付き、岩の間をつ
木陰の蜘蛛の糸打ち払い、草押し分け、 木の枝に取り付き、 岩間を跪て

ま先で立って伸びあがるようにして、七、八町ほど降りてみると、不思議な萱屋が
七八町が程歩み下りて見れば、 怪しの萱屋あり。

あった。中には親子と思える、六十歳余りの老婆と、側には顔立ちは二十歳ほどではあろうが、まだおかつ髪の子供のような者とが向かい合って座っていた。綱は咳払いをし、近寄ったところ、老婆は「貴方は誰だ」と聞く。「私は総州の太守、頼光朝臣の家来、渡部源次綱という者である。頼光様は上洛しなさるところだが、今はこの上の山にいらっしゃる。貴方方をお連れしてこいと使いで来た。さあ、

共にいらっしゃってください」。老婆は聞いて、「太守はどうして、私のこの幽谷の場所を知っているのか」。綱が言うことには、「不思議な雲気に導かれてここに

「雲気に従征して此に来たれり」。

来たのです」。老婆、「それでは太守は雲気のことを知っている人であるか。世の中に人が多いといっても、そんなにまで知っている人は少ない。私はこれから行ってその方にお目にかかろう」と、例の子供を誘い歩いた。先頭には渡部が先ほどの

最前渡部がさしも

ように歩みづらそうにし、行き悩んでいた岩壁を、（老婆は）平地のように歩み進

歩み兼ね、

泥みたりし岩壁を、

平地の如く歩み成して、

めて、太守の前に連れていくのだった。

【四天王揃う】

太守はご覧になり、その子供の普通とは異なる様子にとっても驚きなさって、その姓名をお聞きになった。老婆は答えて、「天地との間に身ごもって天の命を授かる。何をもって姓としたらよいのだろうか」。太守は、「その子供は貴方の子か。

その父はどのような人か」。老婆が言うことには、「この子は私の子である。しか

し父はいない。昔からこの山の中に住んで何年になるかはわからない。（ある時）

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

一日山の頂に出て寝ていたところ、夢の中に赤い竜が現れて私と交わる。その時に雷鳴が非常に大きく鳴り響き、驚いて目が覚めた。その後この子を身ごもった。生まれてから二十一年たった。成長するにつれて、山野くらしも困難とせず、大きな岩をも重いとも思わない。それでいて心は大きな子である」。太守が仰ったこと、

而も其意豁如たり。

は、「昔秦の時代に、沛県の太公が妻の劉媪という者と大きな野地で休んでいた。

大沢の陂に息めり。

そこで夢の中で神に出会った。その時に雷が鳴り、辺りが暗くなった。太公はそんな

時に雷電晦冥なり。

な中でこんなものを見る。蛟竜をその真上に現れる。確かに妻は子を身ごもり、最終的に一子を生んだ。その風貌は、高い鼻で、眉のところの骨が高く出ている顔で

其為人隆準にして

竜顔なり。

ある。この子は成長して沛公となり、秦楚を滅ぼして、帝となる。漢の高祖がこれである。今、この子はこれと同じだ。そのようであっても、隠れた徳が、まだわか

陰徳未だ見れず、

らず、世の人は決してこれを知らなかった。私は、偶然この土地にたどり着き貴方

世人曾て之を知らず。

たちと出会った。運命的なめぐり合わせであろう。今後は私に任せてはくれない

然るべき値遇ならめ。

か。心を尽くして、慈しみを与えよう。どうであろうか」と仰って、老婆は頷き、

心の及ばん程は、 恩をも思ひ宛つべけれ。

「鹿のいる山を獵師は知っていて、魚のいる海を漁師は知っている。太守は武勇に富んでおられるので、その武勇のある所を知っておられる。私はこの子を人に任せようと思ったが、相応しい武将がいなかったため、その望みも意味のないものであった。今から、太守にこの子を預けましょう。そのお命のために召し使ってください

御命の料に召し仕ひ給はれ」

い」と申し上げた。太守は格別にお喜びになって、旅のもてなしの食事などをお取り寄せになり、主従の契りの杯をお交わしになった。綱が調子を取って、「美しい玉はここにある。木箱にしまわれて大切にされていた。ふさわしい値打ちを求めて

「美玉斯に有り。

匱に韞て蔵したり。

善き賈を求めて

いたのだろうか。今（それに見合う）ふさわしい値打ちを招き出した。公（君主）

沽諸（うらめや）。

今善き賈を求めたり。

公に

にお仕えする時を手に入れた」と祝った。太守は笑いのつぼにお入りになり、「よ

事るに時を得たり」

太守笑壺に入り給ひ、

く申し上げたものだ（→素晴らしいぞ）、源次よ。即座のあいさつ、風流なもの

「能く仕りたり源次、

当座の会釈

面白し。

だ。確かに公に仕える時を手に入れたのでその名を酒田公時と名乗るのだ。漢の陳

誠に公に事るに時得たれば、

其名を酒田公時と名乗るべし。

平、張良、紀信、樊噲といっても、綱、季武、貞光、公時、この四人の英傑の上にもどのような者を加えることがあろうか（→これ以上のものはない）」と、お喜びになることこの上ない。そうして、須弥の四天を表現して、頼光の扶翼の臣下、「四天王」と名乗るようになったのだった。

朝廷に仁徳を施し、下々の者に武の威光を振るったので、多くの国の兵たちが、

上仁徳を施して、

下又武威を振るひしかば、

万国士卒

招かないのに頭を垂れ、その家来を望み、食糧を背負って、この国に来て、とうと

招かざるに頸を引いて

其家を望み、

糧を荷なって

う天下の名将とお称えられになったのだった。

頼光四天王最後の勇士、「金太郎」こと酒田公時が家臣に加わりました。幼いころ歌った「まさかり担いだ金太郎」のイメージとは大分異なりますね。公時の名の由来が面白いですし、綱の口上も風流で素敵です。

巻十六は頼光公の股肱耳目の臣下が揃うという大きな節目の巻ですので、武士の象徴である刀の壁紙を選びました。

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m()m

公開：2015/5/23

改訂：2021/3

海熊童子